

<p>政治・法律</p>	<p>【代表的な研究テーマ】</p>
<p>keyword</p>	<p>□ 3.11 後の社会運動における政治アクターと倫理の考察 □ ドゥルーズ哲学の政治思想への応用</p>
<ul style="list-style-type: none"> ■ 社会運動 ■ 反原発運動 ■ 民主主義 ■ ドゥルーズ ■ 新唯物論 	<p style="text-align: center;">課題解決に役立つシーズの説明</p>
	<p>日本では「政治」は身近とは言えません。ふだん政治について語ることはあまりなく、積極的に政治に参加したいと思う人も少ないでしょう。自分と異なる価値観を持った他者と話し合い、現状を変えるために何かを決断し、行動するのは面倒なことです。すでに確立された社会的関係やシステムの中での充足を求めた結果、その外側で起きている現象に無関心になったり、価値観の違う他者を排斥したりする傾向は、日本に限らず現代社会で顕著に見られます。それは、グローバル化により不安定な生を強いられる人々の、やむを得ない防御反応でもあります。しかし一方で、社会の周辺や「外部」に追いやられた人々はますます孤立や絶望感を深めています。不確実な時代に、それでも人々が「内側」に引きこもらず、他者と関わり合い、ともに社会をよりよく変えていくという「面倒くさい」作業に関わっていくとすれば、そこにはどんなモチベーションや価値観があるのでしょうか。それを事例研究と、現代思想を用いた哲学的考察の二側面から探り、現代社会の政治的な閉塞に応答したいと考えています。</p>
<p>田村 あずみ Azumi Tamura</p>	<p>【3.11 後の社会運動における政治アクターと倫理の考察】</p>
<p>国際センター 特任講師</p>	<p>東日本大震災・福島第一原発事故の後、それまで政治に無関心だった人々の多くが反原発デモに参加しました。日本においてデモは、1960年～70年代学生運動の暴力的なイメージが定着し、忌避されていましたが、反原発運動の盛り上がり以降は一般的なものとなりました。運動の盛り上がりは一時的ですが、参加者の中には、ブームが去った後も継続して運動を支えたり、新たなテーマの運動に活動を挙げたりする人もいます。無関心だった市民が、なぜ面倒くさい政治に関わり始め、そして関わり続けるのか。東京のデモ参加者や主催者のべ140人以上にインタビューをした結果、災害という究極的不安定性に直面することで生まれた、彼らの特異なアイデンティティ感覚や価値観を見つけ、英語の研究書にまとめました。今後は、グローバルな「民主主義の危機」への応答の一つとして、この運動の示唆を海外の研究者や活動家に発信していく予定です。</p>
<p>【プロフィール】 ●略歴 ・2005年 立命館大学国際関係学部卒業 ・2005年～2010年 中日新聞社 記者 ・2011年 ブラッドフォード大学(英国) 修士課程修了(紛争解決学) ・2016年 ブラッドフォード大学(英国) 博士課程修了(平和学) ・2016年～2017年 長崎大学多文化社会学部 英語コーチングフェロー ・2018年～ 滋賀大学国際センター 特任講師</p>	<p>【ドゥルーズ哲学の政治思想への応用】</p>
<p>【主な社会的活動】 ●所属学会 ・日本平和学会</p>	<p>ドゥルーズはフランス現代思想の哲学者ですが、彼の哲学を政治思想、特に新たな社会運動思想に接続する試みは、わたしが博士研究を行っていた英国で比較的さかんでした。わたしが特に注目しているのが、ドゥルーズ哲学の個体の捉え方です。彼は、近代思想が想定してきた自律的主体ではない、前主体的な、自己と他者の境界が曖昧になったような存在の可能性に注目します。また、彼の哲学から派生し、近年活発に議論されている「新唯物論(New materialism)」は、人間アクターに限らない、「物質」そのものに内在する創造性に注目します。こうした哲学を手掛かりに、複雑な現代社会において、決していつでも自律的で道徳的な存在になることができない「不完全な」人々が、それでも政治的なアクターとして、他者ととともに社会をより良い方向に変えてゆける可能性について考察しています。</p>
<p>【主な著書・論文】 ・ <i>Post-Fukushima Activism: Politics and knowledge in the age of precarity</i> (Routledge, 2018). ・『「境界を越える」思想—震災後の知と平和学の役割』『平和研究 50号』(近刊).</p>	<p>【研究の意義】</p>
<p>【連絡先】 azumi-tamura@biwako.shiga-u.ac.jp</p>	<p>現代社会が抱える問題の多くは、決定的な「答え」が存在しません。むしろわたしたちがそれを求め、強引に導き出すことで、より深刻な問題が発生する場合があります。たとえば原発事故がそうでした。不都合な不確実性を無視して作り出された原発の安全神話は、多くの市民に信じられ、原発のリスクを指摘する人々を沈黙させ、原発の管理体制を弛緩させて、取り返しのつかない重大な事故へと繋がりました。解決策の提示はもちろん大事ですが、避けられない曖昧さや不確実性を強引に排除して、完璧な解を与えるのではなく、曖昧さや不確実性ととも生きつつ、それが致命的な破綻をもたらすことのないよう、延々と面倒な関与を続けていくことが政治と考えています。その方法を人々の実践から見つけ出し、新たな政治思想として描き出すことがわたしの目標です。</p>